

めざせ「いきいき 明治っ子」

～ はきはき どんどん ぐんぐん ～

<http://www.meiji.jorne.ed.jp/>
E-mail → meiji@jorne.or.jp

3学期 みんな元気にスタートしました

本年度のまとめをする大事な3学期がスタートしました。年末年始を有意義に過ごした子どもたちは、蓄えたエネルギーを様々な場面で発揮し、毎日元気いっぱい活動しています。当面の目標は1月23日(木)の「くぶる祭」(昨年までは「春を呼ぶ会」)を成功させることです。くぶる班ごとに話し合い、みんなが楽しめる出店を準備して、当日を迎えます。今年はプログラムの中に学年ごとの音読発表も加え、子どもたちの活躍の場面を増やしました。たくさんの方々からお越しいただき、子どもたちと一緒に楽しんでいただきたいと思います。



「くぶる祭」準備の様子

2月には「ウィンタースクール」が行われますが、今年は暖冬少雪のためスキー場にはあまり雪がないようです。開催まであと2週間くらいですが、楽しい冬の体験ができるよう雪の便りを待ちたいと思います。



金管練習の様子

3月には金管移杖式が行われるため、3年生9名も仲間入りして新チームの金管練習が始まりました。頼りになる6年生から一生懸命指導してもらい、だんだんいい音が出たり、いい動きができてたりしてきました。あと2か月しっかり練習して、素晴らしい引き継ぎができるようにみんなで頑張ります。

本年も皆様からあたたかいご協力とご支援をいただきながら、子どもたちの力を伸ばしていくよう職員一同全力を尽くします。どうぞよろしく願いいたします。

あいさつレベルアップ作戦 開始!

先日、生活朝会の中で1・2月の生活目標についての話があり、全校であいさつのレベルアップを図ることになりました。学級ごとにどんな取組をするかについて話し合い実行した結果、今までよりも元気で爽やかなあいさつができるようになってきています。校長と教頭が毎朝玄関であいさつしながら、子どもたちのあいさつする姿を見て、その日のあいさつチャンピオンを給食の時間に発表していることもあいさつのレベルアップにつながっているようです。



今回の取組が、爽やかなあいさつを定着させることにつながるよう、みんなで頑張りたいと思います。学校でも、家庭でも、地域でも、みんなが気持ちよく生活し、幸せな気持ちになれるような素敵なあいさつを交わし合っていきましょう。

本当の優しさ・人間の心の強さと弱さ 校長講話

ここは、イスラエルのある病院の一室です。うす暗い室内には、多くの重症患者がベッドを並べて横たわっています。窓がたった一つしかなく、しかもそれは、ぶあついカーテンによっていつも閉ざされています。消毒薬のにおいが、室内の重苦しさをいっそう濃いものにしていきます。

患者たちの唯一の楽しみは、病室の閉ざされた窓にいちばん近いヤコブが、体をやっとの思いでねじ曲げながら、カーテンのほんの小さなすき間に顔をつつこんで、外の様子をながめ、それをみんなに話してくれることでした。

今日もヤコブは、苦しうに身を乗り出して、すき間に顔を近づけ、

「ほら、向こうの方からいつもの花売り娘が、バラをいっぱいかごに入れてやってくるよ。とてもかわいい娘だよ。」

と教えます。みんなも顔をほころばせながら、

「バラの花の色は何色だい。きれいだろうね。」

「今日はどんな服を着ているのかね。良くなったら、一緒に話をしてみたいものだ。」

「ほら、今日は雨が強いから大変だ。でも、子どもたちが水たまりをピチャピチャやって遊んでいるよ。子どもは元気だなあ。」

「ちっちゃな長ぐつだから、水が中に入っちゃって……。後でお母さんにしかられなきゃいいが。」「わしにも孫が二人いるが、大きくなっただろうな……。」

ヤコブが外の様子を話してくれる時だけは、暗い病室に、何か期待と夢が入り込んでくるのでした。

私は、数年前から足の骨がとけていく病気にとりつかれ、ここに運ばれたのでした。同室の患者たちも、何らかの重い病気にとりつかれた、身よりのない者ばかりです。ここでも、何人かの患者が入ってきては、何人かが出ていきます。出ていくといっても退院するのではなく、あの世からのお迎えが来るのです。

いつの間にか、私はヤコブに次いで二番目に古い患者になってしまいました。治る見込みのない重苦しさの中で、ヤコブの話だけがせめてもの希望でした。しかし、そのヤコブが眠ってしまうと、どんなに外の様子を知りたくても、どうしようもありません。動けぬ体をじりじりさせながら、ヤコブの話のを待つしかないのです。いや、ヤコブだけが外の世界を知っているのが、うらやましくもありました。しかし、みんなが行きたがっている窓ぎわのベッドは、いちばん古くからこの病院にいるヤコブの特等席でした。

そのうち私は、何となくヤコブがにくらくなってきました。寝たきりでみんな苦しんでいるのに、ヤコブだけがなぜ外の様子を知る権利があたえられているのか。みんなだって知りたい。みんなだってあこがれている。ベッドをかえてほしいと思っている者はたくさんいるのです。しかしヤコブは、がんとしてその場所をゆずろうとはしませんでした。

ある時、こんなことがありました。特に重症だったニコルが、

「ねえ、ヤコブさん。どうやらお迎えが来たようだ。今日一日だけでいいから、ベッドをかえてくれないかな。少しでも外のいぶきにふれて、あの世とやらへ旅立ちたいんだが……。」

しかし、ヤコブはニコルの申し出を無視しました。翌朝、ニコルは冷たくなっていました。病室はいつになく重く沈んだ空気に包まれました。

「かわいそうに、ニコル。」

「ヤコブが代わってあげればよかったのに……。」

とつぶやく声が聞こえました。

私だって外が見たい。窓ぎわのベッドへ行きたい。そうだ、ヤコブが死ねばいい。そうすれば、その次に古い私とそのベッドへ行けるのだ。

その日から、私は心の中で、ヤコブの病気が重くなることをひそかに願いました。みんなと一緒にヤコブの話に笑っている時も、心の奥底では、にこりともしない自分がいました。

その年の冬は、例年になく寒く、病室もしんしんと冷え込みました。

どうやらヤコブの様子がおかしい。何となくかわいた咳をしている。みんなは、いつものように外の様子を聞きたがりませんでした。しかし、今日のヤコブは話したがりませんでした。

その晩、ヤコブは苦しい息の下で、やっとの思いで身を乗りだし、しぼり出すような声で外の様子をみんなに伝えました。

「明日は……いい天気だよ。……星がいっぱい出ている……きっと……いい天気になる……。」

そこまで言うと、がっくりと頭を落とし、そのまま一言も話さなくなってしまいました。看護師がやって来たとき、ヤコブはすでに息が絶えていました。

みんなが悲しみました。私もみんなと一緒に悲しい顔をしていました。けれども、どこかで笑っている自分がいたのです。

「これで外の様子をひとりじめにできる。みんなになんか知らせてやるものか。おれひとりだけで楽しむんだ。」にんまりと笑いがこみ上げてきます。

いよいよ窓ぎわのベッドへ移ることになりました。昨晩は、気持ちが高ぶって眠れませんでした。

私は、看護師に抱きかかえられて、カーテンのそばに横になりました。今になって睡魔がおそってきましたが、眠さをがまんして、私はカーテンのすき間をのぞき込みました。

そこから見える外の景色、これこそ自分が求めているものでした。期待に胸がうちふるえました。

カーテンの向こうは、なんと冷たいレンガの壁だったのでした。

全校朝会で子どもたちに話しました。この話を読んで、もう一度本当の優しさとは何か、人間の心の強さと弱さについて考え、ご家庭でも意見を交わし合ってみてください。

